九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

上代におけるë～ö交替の周辺

森山，隆

https://doi.org/10.15017/12269

出版情報：語文研究. 18, pp.1-10, 1964-08-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

上代における ë〜ö 交替の周辺

森山隆

一

別稿「上代に残存するö—u対応について」の中で触れたやうに、[1]これまで多くの先学によって意味の類似を指摘されながら、あへて一群の母音交替現象として集約されなかった次のやうな対応関係がある。

ネ（音）〜ノル（告、罵）
セ（背）〜ソル（反）
テ（手）〜トル（取）
メ（目）〜モル（守）

これらの一音節名詞と二音節動詞の形態上の特徴は、二音節動詞はいづれも語尾「る」を保有してあたかも一音節名詞に「る」が接尾した形であって、しかも一音節名詞と動詞語幹母音の間にë（e）〜ö（o）の母音交替が行はれたかに見える関係を有してゐる。さうしてこの両者はまた、お互ひに全く無関係である、とはいひ切れない意味的関連（この点こそ先学がしばしば言及されたところである）を有し、かつて動詞の形成に際して一部の名詞が参画したのではないかといふことを推測せしめるものがある。しかしながら、すでに上代においても少数の事例しか指摘し得ない右の関係がはたしてそのまま認められ得るものであるか甚だ疑問なのであるが、それにも拘らず一方においては古代語の構成とその性格について、興味ある示唆を投げかけるものではないかとも思はれるのである。したがってその可能性の線に沿って以下の考察を試みることにする。

まづネ〜ノルの関係について。ネ（音）に関係を持つ動詞はノルの外にナル（鳴）、ナス（鳴）が想定され、ノルのみが直接ネとの母音交替の関係にあるとばかりは見ることができないかも知れない。あるいは上代においてもなほ優勢な痕跡を持つa〜ö対応を背景に、ナル対ノルの意味分化の関係を措定することも可能である。しかしながら、そのいづれであるにせよ、ナル、ノルの動詞語と名詞ネとの間に意味上の関連があり、派生関係にあったのではないかといふことに、ひとまづ留意しておくことにしよう。

セ〜ソルについては、ソルに充てはまる〈反る〉に該当する適確な事例が上代に見当らない。ソル（反）とソク（退、離）に平行した意味関係が存するならばソルのソも乙類であらうが、一方では

ウキジマリ蘇理タタシテ（神代記）
祖リノボレル貌　（新訳華厳経音義私記）

などの甲類ソをもつソルなる語が存在し、またソルを基にしたと思はれる

アマ曾曾理　（万十七・四〇〇三）

のソ乙を語幹とする語も存在するので、上代にもしソル（反）が実在したとしても、ソの仮名遣を決定的に推測するのはやや困難なことである。岡田希雄氏が「反るが背（ソ）と関係あるならば、乙類で」[2]とされたのは、セ（背）〜ソ（背）といふ、名詞間におけるいはゆる露出形と被覆形の母音交替現象から推定されたものであらうか。

さて、テ〜トルの場合も問題はいささか複雑である。トル（取）は上代に甲乙両形のトをもって存在するが、すでに有坂秀世・大野晋・泉井久之助等の諸氏に代表的見解があるやうに、泉井氏はト（乙）ルを文献以前の原形であるとし[3]、逆に大野氏はト（甲）ルを古語の形であるとされる[4]。また有坂氏は、同じく甲乙両形をもつトフ（訪、問）の処理から類推すれば、トルにも甲乙両形による意義の差を発見しようとする意図を持って居られたかの如くである[5]。一般に甲乙両形が併存するときに、それらをいかに処理するかといふことになると、甲乙両形のどちらが古いか新しいか、といふ立場と、両者に意義上の差があるのではないか、と見る立場とが存在する。もっとも上代におけるすべてが、右の立場で割り切れるものではないことも早く指摘されてゐるところでもあるが、ただ当面の問題について、先に述べたネ〜ノルの関係と形態上やや相違する点は、ネにはナル、ノルといふ「る」接尾辞による派生関係にあったかに見える二つの動詞が存在するのに比し、テはタといふ名詞形を持つがタルといふ形の意義上密接な関係にあると想定できる動詞を持たぬこと、したがって、ノルの場合はナルと平行して考へられる可能性はあっても、トルはテないしタからの接尾辞による派生的関係としてしか捉へられさうにないことである。その派生の方向はしばらく問はぬとしても、古く溯ったある時代に、一音節名詞と二音節動詞の間に、語形成上の関連があったことが推測できるやうである。

トル（甲、乙）の意味については〈取る〉がその中核的意味をなしてゐるやうであるが、たとへば宣長も指摘したやうに[6]、景行記（日本武尊の條）に

(1)「西方有熊曾建二人。是不伏無禮人等。故取其人等」而遣。
(2)「…意禮熊曾建二人、不伏無禮聞看而、取殺意禮」詔而遣。

とある「取其人等」と「取殺意禮」を比較すると、詔の内容がほぼ同一の表現で、諸訓おほむね両例ともに「トレ」と訓むことを考慮すると、トルの意味に古くは〈殺る〉をも含んでゐたか、あるいは〈殺る〉と〈取る〉とが区別されてゐたかのいづれかであらう。古く溯って区別があったとするなら、甲乙の差による区別といふことが考へられる。その際いづれの形がテ（手）に関連のある語であったか、また両形ともに関係を持つものであったか、やや複雑な問題

をはらんではゐるが、テ～トルの関係はかなり興味深いものがあるといへる。

メ～モルについては、モ音節の表記に甲乙両類の書き分けのある古事記において、

イユキ麻毛良ヒ（記一四）

とモ甲に表記されてゐるので、動詞語幹における確実なオ甲の事例とも見れるが、周知の如く甚だ特異な事例ながら魏志倭人伝に「ヒナ母リ」と記されてゐるので、この「母」表記が甲乙いづれを表記したのか、あるいははたして〈守ル〉の意なのであるか問題は残る[7]としても、モル（守）の語も七世紀を溯ること三、四百年以前にすでに存在してゐたかに思はれる。したがって、動詞モル成立の原初形態がモ甲であったかモ乙であったか分明ではないが、同時にë～ö（o）交替らしき現象もかなり古い時代に行はれたと措定できる可能性が認められよう。また、このモル（守）を「見守る」の意として「目の要素を含む」[8]と分析するのが今日一般に認められた解釈であるなら、マモルといふ語は〈目守る〉である限り、モルの語に〈目〉の義を感じなくなってきた時代の造語であるだらう。したがって前掲古事記歌謡にマモルの形が見えることは、モル自身が上代以前にかなり古く溯って形成された語であることを推測せしめるのである。

以上の四事例を通観すると、あたかも一音節名詞ë（e）と動詞語幹ö（o）との間に母音交替が行はれたかの如き観を呈してゐる。また、ネ（音）、セ（背）、テ（手）は上代において甲乙の書き分けがないのでë（乙）と断定することはできないが、少くともë（乙）相当であったことは、それぞれ被覆形としてナ（名）、ソ（背）、タ（手）の形を有することからも推測できる。したがって、これら一音節名詞をe（甲）でなくë（もしくはë相当）と推定し、これら四事例の共通の性格をë～ö（o）の交替と見ることは、ëに関する限り穏当なところであらう。ただここで臆測すれば、右の現象を認めるならそれはë～ö（o）交替でなくa～ö（o）交替ではないかとする解釈も出てくる余地はある。つまり有坂秀世氏が「国語に表はれた一種の母音交替について」の中で指摘されたやうに、被覆形と露出形との関係は被覆形の方が古く、露出形は被覆形から発達した形である、とする仮設の方向に従って、これまでたとへば、古語は熟合語に残存する、露出形は語幹末尾音の変質による、さらに名詞構成接尾辞i母音の連接による母音転化、などのさまざまの試みによって露出形の派生を説き、被覆形を本来の形とする傾向は強いのである。したがって、語形成を説くならば古いと想定される語尾a形から演繹すべきだとする批判を予想できる。この予想される批判に現在のところ私は組みしない。一つは後節においても論述する如くë（乙）はかなり古くから存在したであらうと思はれること、二に接辞によるa→ö（o）転化はいまだ指摘されたことがなく、大野晋氏のいはゆるa～ö対応[9]は接辞によらぬ語幹内母音の対応であるので、前述の事例と同一の条件にあると思はれないからである。同様に、もし接辞によるë～ö（o）交替が行はれたとすると、上代語に見えるë～ö交替現象との相異を明らかにしなければならない。

二

すでに大野晋氏が「うつせみの語義について」[10]の中で述べられたやうに、上代において若干の　～ö交替現象が存在するのは、ほぼ確かなことであらう。これまでに指摘された事例は

(1)セ～ソ（背）
(2)ウツセミ～ウツソミ（現人）
(3)エシ～ヨシ（吉）
(4)エシノ～ヨシノ（地名）
(5)トヲラヒ～トエラヒ（揺）

などの語であるが、(1)の事例と(2)～(5)の事例は若干その性格を異にしてゐる。(1)は有坂秀世氏がë～ö交替の孤例的事例として挙げられたやうに、露出形ë対被覆形öの関係である。ところが(2)～(5)の事例は一語内におけるë～öの交替現象であって、厳密に言へばセ～ソの関係と条件を異にしてゐる。したがって、(1)は(2)の変化ウツシオミ→ウツソミ→ウツセミを直接に支持する現象ではない。

(2)の変化は大野氏によればウツソミ→ウツセミと説明されるので→öの方向に変化したと見なされる。これに対して(3)の事例は

シマヘモ曳キ　（紀一二六）
タダニシ曳ケム（紀一二八）

と、エキ・エケの形が書紀歌謡に見え（古事記には見えない）一方、

与シトキコサバ　（記六六）
フタヘモ豫キ　（紀四七）
アニ豫クモアラズ（紀四九）
タグヒテゾ豫キ　（紀五〇）
タグヒ預ク　（紀一一三）

のヨシ系の形もすでに記紀に散在し、万葉集ではすべて

芳野吉見興　良人四来三（一・二七）

のやうにヨシ系の形しか現はれてゐない。このエシ形とヨシ形は、おそらく従来も説かれてゐるやうにエシ形が古形であって時代が下るに従ってヨシ形に取って代はられたものと思はれる。したがって、ここではe→öの方向に変化したものと考へられる。すなはち万葉集では新旧形の交替が完全に行はれたものと思はれる。

(4)の「吉野」の地名については

ミ延シノ　（記九八）
ミ曳シノノ曳シノ（紀一二六）

と記紀にはエシノの形で表記されるに対し、万葉集では

ミ興シノ　（十八・四〇九八）
余シノノミヤ（十八・四〇九八）
興シノガハ　（十八・四一〇〇）

のやうに仮名書きの数例によればすべてヨシノの形である。単純に推測すればここでもエシノ～ヨシノのe→öの方向に変化したものと考へることができる。また地名の「住吉」が万葉集において「須美乃延」（二十・四四〇八）の形を保持して「スミヨシ」の形が未だ現はれないところを参看すれば、形容詞におけるエシ～ヨシの交替がまづ行はれた後に、地名においていささかの遅速を伴ひながらエ～ヨの交替が行はれたのであらう。したがって(3)(4)の事例はとも

にe→ö の方向に変化したものと見ることができよう。

(5)の事例は

aつり舟の得乎。良布みれば（九・一七四〇）

bゆこさきに波な等恵。良比（二十・四三八五下総国防人歌）

であって、この二語はほぼ同意義と見れる動詞である。ただもし同語であったとしても、b形はa形の変化形であるか、防人の方言形であるか分明ではないが、後者であるとするなら、駿河国防人歌に集中的に現はれる、中央語öに対応する方言形ëと同列に処理されるべき事例となる。もっともb形が属する下総国防人歌には中央語öに対応するëの形は現はれず、中央語eに対応する位置にöの現はれる逆の事例は存在する。

以上の五例の中、(5)の事例を一まづ保留すると、(2)はö→eの方向に変化し、(3)(4)は逆にe→öの方向に新旧形の交替が行はれたことになる。そして上代に入ってからの一語内における母音の転化で、その変化は個別的散発的であるので、これが直ちに(1)の事例の露出形対被覆形の関係にあるセ～ソの母音交替の現象に連なるものとは思はれない。その意味でやはりセ～ソの現象は孤例的であり、上代以前の時代における母音交替現象と見得るのである。

三

上代におけるö～eの転化現象を一応除外して考へ得るとすれば、セ～ソ、ネ～ノル、テ～トル、メ～モルなどに見受けられるë～ö交替現象にはどのやうな意味が含まれてゐるのであらうか。もし、ソル、ノル、トル、モルなどの語が、名詞に接辞して成立した動詞であるとするなら、おそらくこれは有坂氏がすでに指摘したチ（鉤）～ツル（釣）（この場合はもちろんi～u交替）の関係に平行するものであらう。あるいはタケ（嶽）～（コ）ダカル（高）も同様な性格を持つものであるかも知れない。名詞から動詞を派生する方法は、この他には上代に見える例としてはソコ（底）～（ミナ）ソコフ（底）、シタ（下）～（ミナ）シタフ（下）のやうな化石的な動詞に事例を求め得るのみで、中古以降の、漢語にサ変動詞の付着した形の、盛な造語法はまづ見られないのである。したがって、「る」接尾辞による動詞の派生も、もし存在したとするなら上代を溯るかなり古い時代、いって見れば有坂氏の指摘された四種の母音交替が成立した時代に溯り得ると思はれる。

さて、右の母音交替現象にあづかる一音節名詞群の成立の由来はいかやうなものであらうか。かつて鳩井孝氏は、一音節名詞について、

一、新たに一音節名詞が派生した例は、ほとんどない。

二、しかし、一音節名詞のなかまに加えられた語彙は、少くない。それは漢語起源のものがあるからである。

三、一音節名詞のうちには、二音節以上の形の語でおきかえられてほろびたものが相当にある。

四、文献以後の時代における一音節名詞が文献以前にさかのぼってどのような歴史を経ているかはもちろんわからない。しかし、二音節以上のものから変化したものがあるかもしれない。

との所見を要約発表された。[12] 当面の関係ある語彙は、エ列の母音を含む一音節の語、すなはちケ（食、日）セ（背）テ（手）ネ（音、根？）ヘ（上）メ（目）エ（良）に代表される語彙で、これらは文献時代に入って今日に至るまで語形的にも意味的にもほとんど変化を見せなかった語彙である。したがって文献時代に入って突然形成された語彙群であると見るより、上代以前の時代においても存在してゐたと見ることができる。特にその中核をなすエ列乙類は、かつて述べた如く、[13] 上代以前にはエ列甲類を凌ぐ語彙数を保持してゐたと推定されるし、同じエ列乙類であっても、アメ～アマ（天、雨）メ～マ（目）などë～a交替に属する語と、セ～ソ（背）のやうなë～ö交替の場合とがあるので、単純にai～ëの母音転化によってのみエ列乙類の形成を説明することは当を得ない。エ列甲乙両類は、一般に想像されてゐる以上に安定した位置を音韻体系の中に占めてゐたと思はれるし、少なくとも上代を溯る二・三百年の間においても、その存在を指摘し得るのである。

早く浜田敦氏は魏志倭人伝以下の中国史書に見える日本語語彙について、上代特殊仮名遣の書き分けに相当する事実が存在することを指摘され、[14] 近くは「日本語の歴史1」[15]においても同様の論述がある。これらの国語語彙が、上代日本語とどのやうなつながりを持つものであるか依然不明ではあるが、そこに日本語の語序と語構成を発見することはさして難事ではない。したがって、そこに上代日本語の前史を求めることは、あながちに否定されるべきではなからう。

エ列に限っていへば、魏志倭人伝に「難升米」（人名）隋書に「姓ア毎、字タ利シヒコ」（天皇名）があってエ列乙類を予想できるやうし、浜田氏は「卑弥コ」「カタ毗」「マ卑ツキミ」などの語に、それぞれメ、ベ、ヘを予想できるとされる。言って見ればエ列甲類的位置であらうか。これらの推測は資料の信頼度に難があるとはいへ、七世紀初頭から更に溯って三世紀末の資料にまでエ列が存在したらしい文証が存することは、（その存在の不確かさは、しかしながら日本語の他の音節の存在の不確かさと全く同程度なのであるが）もしëがaiの転化によってのみ生ずるとするならば、少なくともその証とされるナガイキ（長息）→ナゲ（乙）キ（嘆）、タカイチ→タケチ（高市）の転化形も四百年以前に行はれた変化の過程をそのまま反映してゐることを証明する必要があらう。ただ私はこの説に組みしないので、ここでその論証を展開する必要はない。

エ列がその痕跡を上代以前三・四百年の間に印してゐたとするなら、先にも述べた如く、一応安定した位置を占めてゐたと称することも言ひ過ぎにはならないであらう。したがって上代に存在する、エ列母音より成る一音節名詞がその出自ならびに構成について、本来的な母音によるものではないとする見方は、更に三世紀以前に溯った時代の臆測であるといへるだらう。

四

有坂秀世氏が指摘されたë～a交替の実例の中には[16]次のやうな興味ある語が含まれてゐる。その一つはウケ～ウカ（食）の交替である。ウケの実例の中にはオホミケ（大御食、万二十）トヨミケ（豊御食、天寿国曼陀羅）オホゲツ（大食ツ、神代記）などのやうに、

あたかもウケのウが脱落もしくは吸収されたかに見える形があって、またそのやうに解する立場も当然のことながら存在するが、〈食〉にあたるのはケであって、ウケはその熟合語といふことも考へられる。冠せられたウの意味は今日明らかではないけれども、食物に対する「ほめ詞」と取るのは穏当な見解であらう。したがって、ウと同様の修飾機能を果してゐると思はれる〈豊〉といふ語を、更にウケの上に冠するのは最大級の修飾に近く、またミケ、オホケの形を一律にミウケ、オホウケのウが脱落したものとばかりは言ひ切れぬものがある。このウケ〜ウカの交替はその基底にケ〜カの交替が存在すると見て差支へなからう。しかもトヨウケといふ語順が成立し、ウトヨケの形でないところを見ると、ウとケとの結合は一語的緊密さを持つか慣用された言ひ方であったのだらう。ウケがすでに緊密な結合関係にあり、他の修飾語の介入を許さなかったとすると、この構成は古く行はれたと推察される。その下位構成語となったケは、ウケの成立以前から存在しなければならぬ理屈になるので、一音節ケ（食）の存在はかなりの溯源を許されるはずである。

右の類例はe母音から成る一音節語の成立について甚だ示唆に富む例だと思はれる。同様に古く一音節名詞として存在しながら、上代においてすでに一語的緊密な構成を示すものにウヘ（上）がある。古事記上巻の訓注に、

上津綿津見神、訓上字閇。

とあるやうに、ウヘの形はワハ（上）と母音交替をしつつ、上代においてすでに一語として存在してゐたかに見えるのであるが、他方、

キノ陪　（紀一〇〇、一〇一）
イハノ杯　（紀、皇極二年、一〇七）
ヒザノ倍　（万五、八一〇）
サカヅキノ倍（万五、八四〇）
ヤマノ閇　（万五、八七二）
ソノ倍　（万十八、四一二五、四一二六）

のやうに、助詞「の」に接続して「ヘ（乙）（上）の形を取る例も存在する。これらは単純にノウヘ（の上）→ノヘ（の上）とウ母音が脱落した形である、と説かれることが多いが、これらのヘ（乙）が〈上〉を意味するにも拘らず、一方において

a　カハノ倍（記　五八）
b　カハ杯　（紀一一七）
c　シマ倍　（紀一二六）

のやうにヘ（乙）でありながら〈上〉といふより〈辺〉に近い用法すら存することは、従来指摘されてゐる如くである。[17] しかしながら、上代において〈辺〉に該当する語には甲類の「ヘ」が存在する。とはいふものの前掲のヘ（乙）〈辺〉が決して単なる誤用であり得ないことは、たとへば「上」字を使用した次の例

於是其伊須気余理比売命之家、在狭井河之上（神武記）

において、この「上」字の意味は、これを「サヰ河ノベ」もしくは「サヰ河ノホトリ」と訓むにしても、いづれも〈辺〉の意味であって〈上〉の意味ではない。[18] 「上」字を〈辺〉の意味に使ふところから見ると、前掲abcの仮名書きの類例と相まって、ヘ（乙）に

〈上〉〈辺〉の両義が古く含まれてゐたことを予想させるものであらう。この際、万葉に見える

玉鼻のこの可波加美に家は在れど　君をやさしみ

あらはさずありき（五、八五四）

のカハカミ（川上）は、「狭井河之上」（神武記）の「上」字の用法の反証的存在とはならないと思はれる。

さて以上の例から考へて見ると、ヘ（甲）とヘ（乙）はその意義において〈辺〉対〈上〉といふ確然たる対立があったわけでなく、今日からは未だその意味分野を明らかにすることはできぬが、ヘ（甲）はおほむね〈辺〉の周辺に、ヘ（乙）は〈上〉の義に使用されつつも、ある範囲において両者は微妙に重なり合ふ場合もあったものと思はれる。その際、ヘ（甲）が〈上〉の義に使用される事は稀れで、もっぱらヘ（乙）が〈辺〉の義に重なることが目立つが、またヘ（甲）には〈重〉の義も存するので、これらの意義分化と分担の過程はかなり複雑である。しかして〈上〉なる義を明確にするためにもウヘ（上）なる語が形成される必要があったのではないかと考へる。ウヘ（上）がウハの交替形を持つ如く、a b c の用例のベ（乙）〈辺〉も場合によってはバ〈場〉なる交替形を持ち得たことも考へられる。もっともウヘ（上）のウの義も分明ではないし、バ（場）の確実な実例が上代に存在するわけでもない臆測ではあるが。

〈上〉と〈辺〉は、ヘ（乙）ヘ（甲）といふ甲乙両類による意味の分担があったとして、右の記紀万葉の例を検するにウヘ（上）を意味するヘ（乙）は専に清音表記であるに対し、〈辺〉を意味するヘは甲乙を問はず、例へば

カハノ倍（記五八）（倍は記においてすべて濁表記）

トコノ弁（記三四）（弁は記においてすべて濁表記）

のやうに濁表記である。（前掲b c の紀の例は確実には清濁の決定ができない）もちろん濁音一音節名詞は上代日本語に存在しなかったと考へられるので、〈辺〉を意味するヘ（乙）もその基本形は清音であったと思はれる。しかしながら〈上〉の場合も〈辺〉の場合も、単独に〈上・辺〉といふ形を見出し得ず、常にウヘ〜ウハ（上）の形でしか被覆形が現はれないところを見ると、この母音交替現象はウヘといふ二音節語が形成された後に行はれたものか、あるいは一音節被覆形ハ（上・辺）が、優勢な二音節被覆形ウハに取って代られて埋没してしまったものであるか、そのいづれにしても、ヘ（乙）〈上・辺〉の形は一層古い時代から存在してゐたと言はねばならない。

これらのヘ（乙）が上代語の中に化石的に存在する例として、ナヘ（助詞）ガヘ（助詞）サヘ（助詞）などの語に含まれる下位成分ヘ（乙）を挙げることができよう。ナヘは「…の上に重ねて」ガヘは「…が上に更に」、サヘは「…その上に加へて」の義であると思はれるので〈上〉の共通意義素はほぼ推測できるだらう。もっともこれらの語は「並べ」「添へ」などの語源説もあるので、当然先に述べた解を主張するための論証が必要であり、明証となし得ないが、埋もれゆく語に時代による磨滅を考へれば、ナヘ、ガヘ、サヘの三語に含まれてゐると推測されるハ（上）の古さも逆に想定できるのではないだらうか。これらは単にウハ（上）の頭母音脱落現象と解

し去るのは一考を要することである。[19]

以上のケ（食）、ヘ（上）の周囲を具体的に掘り下げることによって明らかになってきたことは、これら一音節語は母音交替ë～a現象が盛に行はれる以前に、すでに存在してゐたと思はれることで、またこれらの一音節ëは、あるいは二音節語を形成して後、はじめてë～a交替現象に参加した可能性もあるといふことである。

五

従来、ëの形成に関しては、被覆形の形が露出形をとる際に発達したのがëである、――つまりëの前身にaを想定し、たとへばai→ëのやうな変化を予想するのが通説であるが、この説は同時に次の憲象をも説明し得るものでなければならぬ。その一つは、被覆形においてaを取る語、その二、三の例を挙げれば、サカ（坂）タ（因）カマ（鎌）クサ（草）などの語において、露出形になぜëを生じなかったのであるか、といふ点。第二に、被覆形にaを持たぬ、カメ（亀）サメ（鮫）マメ（豆）などの語末ëは、どの径路を通って発生したものであるか、といふ点。第三に、先述したやうにai→ëの変化現象が上代以前に古く溯って考へられるといふ証明。通説においてはこの三点の説明が必ずしも明快ではない。

一方、ëを取り巻く種種の問題について以上述べてきたことを要約すると、

一、中国史書などに見える傍証から、上代以前にëがすでに存在してゐたことはほぼ確実である。

二、ëからなる一音節語の中には、二音節語を形成してのち、活潑に母音交替現象ë～aに参加し、一方ではナヘ、ガヘなどの語の中に埋没してゆく古いëも存在してゐたらしいこと。

三、上代のe～ö交替現象以前に、少数の一音節名詞ëと二音節動詞語幹にë～ö交替現象が存在したらしいこと。これはセ～ソの交替現象と、またチーツルの間に見られる名詞～動詞の派生現象と性格を同じくしてゐたらしいこと。

などの諸点を指摘、解明することによって、とかく平面的に考察され勝ちなëの問題が古く溯り得る可能性を試みて見たのである。

注

(1) 国語学56「上代に残存するö－u対応について」

(2) 国語国文昭16・3「新訳華厳経音義私記倭訓攷」57頁

(3) 京都大学文学部五十周年記念論集所収「上代日本語における母音組織と母音交替」一〇〇九頁

(4) 「上代仮名遣の研究」21頁

(5) 参照。「上代音韻攷」32～36頁

(6) 「本居宣長全集」二、一五九九頁

(7) 浜田敦「魏志倭人伝などに所見の国語語彙に関する二、三の問題」人文研究三の八

田中卓「邪馬台国の所在と上代特殊仮名遣」国語国文昭30・5

また最近この問題に触れた論文としては、筏勲「上代文献における仮名もとの問題（上）（下）」国語国文昭39・3、39・4がある。

(8) 武田祐吉「記紀歌謡集全講」69～70頁
(9) 「日本語と朝鮮語との語彙の比較についての小見」国語と国文学昭27・5
(10) 文学昭22・2所載
(11) 「国語にあらはれる一種の母音交替について」国語音韻史の研究増補新版
(12) 「歴史的に見た一音節名詞」国語学39　国語学会研究発表会要旨
(13) 「上代におけるエ列乙類の性格」語文研究第八号　昭34・2
(14) 注7に同じ。
(15) 同書三四一～三六〇頁三、魏志倭人伝のことばは日本語か。
(16) 注11論文参照。
(17) 有坂秀世「上代音韻攷」28頁～31頁
(18) 万葉巻八「石ばしる垂水の上のさわらびの」（一四一八）の「上」をばくぜんと解釈する注釈書は多いが、岩波古典大系頭注（二・二八二頁）のごとく「ほとり」の意に注すべきであらう。
(19) 参照。拙稿「上代における母音音節の脱落について」語文研究第6・7号昭32・12

受贈雑誌　昭和39年1月～5月（その一）

樟蔭国文学（大阪樟蔭女子大学）	1	日本文学（東京女子大学）	22	名古屋大学文学部研究論集（文学）	12
女子大文学（大阪女子大学）	15	国語国文学研究（北海道大学）	27	金沢大学法文学部論集	11
文芸研究（明治大学）	11	国文目白（日本女子大学）	3	金沢大学教育学部紀要	12
人文科学研究所年報（明治大学）	4	文学論集（佐賀大学）	5	鶴見女子大学紀要	1
都大論究（東京都立大学）	3	学大国文（大阪学芸大学）	7	紀要（同志社大学）	7
説林（愛知県立女子大学）	12	教室（大分大学）	8巻1	文学論藻（東洋大学）	27
紀要（愛知県立女子大学）	14	滋賀大国文	1	東洋大学大学院紀要	1
山辺道（天理大学）	10	中央大学国文	7	甲南国文	11
可里婆爾（信州大学）	3	鹿児島大学文科報告	12	論究日本文学（立命館大学）	22
人文研究（神奈川大学）	26～27	山口大学文学会誌	14巻2	文学論集（佐賀大学）	5
人文論集（静岡大学）	14	法政大学文学部紀要	9	岐阜大学研究報告	12